

なかなか治らぬ「非結核性抗酸菌症」

せきやたんなどの呼吸器症状が徐々に悪化し、なかなか治りきらない厄介な病気で、なぜか50歳代の女性に多いのが「非結核性抗酸菌症」だ。しかし早期発見できれば、病状がうまくコントロールできるという。医師らは「血たんなどの異常があったら、すぐに専門医を受診して」と呼びかけている。

せきが出る 体がだるい

「各国から中年女性を中心に増加している」という報告があるが、理由は不明だ。名古屋市立大の佐藤滋樹助教授(呼吸器内科)はこの病気の謎を、こう指摘する。

病気の原因は、結核菌の間で「非結核性抗酸菌」に分類される各種の細菌の感染で起きる。症状も結核に似ており、慢性的なたんを伴うせき、全身のげん怠感、微熱などが特徴。感染初期は症状が軽い。ため、気づかずにそのまま

結核と異なり、人から人へは感染しない。国内で最も多く患者を診察する国立病院機構東京病院(東京都清瀬市)によると、推定で毎年2000～3000人の新規患者が全国であるという。同病院の最近の患者数は10年前の約3倍の年間約90人で、全国的にも増えているとみられる。

以前は結核など肺に疾患がある人がかかりやすかったが、近年は肺に疾患のない患者が増加。医療機関によっては6～7割以上を占める。佐藤助教授によると、こうした患者の7～8割が中年の女性という。

患者数の増加の原因は、都市化ともいわれている。原因となる菌は土や池、水道の配管など身近に存在する細菌だが、都市化でいつでも菌

早く見つけて完治も可能

が生息しやすい環境になった、というのだ。東京病院の倉島篤行・臨床研究部長は「女性の患者が多いのは、家事や洗濯で水を扱い、その水が温水化したからだという研究者もいますが、本当のところは分かりません」と話す。

倉島さんによると、予防ワクチンがなく、特効薬もないため、以前は発症から約10年で死亡したが、複数の薬剤を投与する多剤併用療法により、最近では20年以上、良好な状態を保つことも可能になった。早期に発見すると、手術で病巣を切除し、ほぼ完治できる場合もあるという。

倉島さんは「自然界に常在する細菌が原因のため予防は困難だが、早期に治療を始める」と効果が上がる。異常に気づいたら早く専門医に相談してほしい」と話している。